

渡辺照宏著

外国語の学び方



岩波新書

C 102

boreas

eurus

渡 辺 照 宏 著

外国語の学び方

岩 波 新 書

462

zephyrus

notus

渡辺照宏

1907年—1977年

1930年東京大学文学部インド哲学科卒業

専攻—インド哲学，仏教

著書—「仏教」「日本の仏教」「死後の世界」

「お経の話」(以上岩波新書)

「仏教のあゆみ」「新訳法句経講話」

「新釈尊伝」

訳書—「タゴール詩集—ギーターンジャリ」

ベック「仏教上下」(2点岩波文庫)

「ジャータカ物語」(共訳，岩波少年文庫)

など

外国語の学び方

岩波新書(青版) 462

1962年10月6日 第1刷発行 ©

1980年7月10日 第23刷発行

¥ 380

著 者 わた なべ しよう こう
 渡 辺 照 宏

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

まえがき

この本は外国語に関心を持つすべての人を対象として書かれました。年齢や学歴や職業を問わず、どなたにも参考となるように、というのが著者の念願です。在学中の人にも、社会人にも、教師にも、父兄にも、何かの意味でお役に立ちたいと思います。目的によっては、いろいろな読み方があるでしょう。

1) できることならば本書をこのままの順序でぜんぶお読みください。ただし〈Ⅷ 第二外国語〉の章だけは、必要に応じて拾い読みしておいて、他日あらためてゆっくりご研究ください。

2) 「外国語を学びたいが方法がよくわからない」という独習者、「もっと成績をよくしたい」という学生生徒、「もっとよい教え方はないか」という先生、「うちの子はどうしてこうできないのか」と嘆くお母さん、「学校時代にはものにならなかったが、もう一度」という中年以上の方は、一応Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ(1～111ページ)をこの順序でお読みください。なるべくなら、そこに出してある英文もいっしょに読んでいただきたいと思います。

3) 「急に外国に行くことになった」「外人に会うことになった」という方はひとまず〈Ⅳ 聞き方〉と〈Ⅴ 話し方〉とにざっと目を通してください。そして余裕があればⅠ，Ⅱ(およびⅢ)もお読みください。

4) 大学入試や就職試験の準備には、とくに〈Ⅲ 道具だて〉，〈Ⅵ 読み方〉，〈Ⅶ 書き方〉をていねいに研究してください。

しかし試験の期日が迫っているばあいにはⅢは省いてもけっこうです。

5)「英語はひととおりできた、何かほかの外国語を始めたい」という方は〈Ⅷ 第二外国語〉のうちから、目ぼしいものをひとつえらんで研究してみてください。未知の外国語がどんなものか、どれをえらべばよいか、見当がつくと思います。

この本はまったく実際的な見地から書かれました。中学生から大学卒業生までさまざまな程度の人を相手に、教室で、または個人的に、いくつかの外国語を教え、また国籍の違う多くの外国人に日本語を教えてきた30年ほどのあいだに、同じ「学び方」を何回となく繰返して口に出していることに気がつきました。それと並行して、自分でもいくつかの外国語を学ぼうちに自然に方法を体得したような気がしました。そのあいだには多くの失敗や無駄もありました。間違った学び方というものもあるにはあります。しかし、それよりもせっかく正しい方法で学びながら、根気が続かないばかりに途中で投げだすことの方がずっと多いようです。多くの方はこの本に説明してある方法のいくつかは、すでに経験ずみのことだと思います。そういう方は迷わずにその方法を続けてください。外国語が不得手だという方も、おそらく、こういう方法を聞くには聞いたが、まだ試したことがない、ということが多いかも知れません。

真理はいつもきわめて単純なものです。学び方といっても特別に軽便な方法があるわけではなく、根気よく勉強する以外には道がないという、わかりきったことを説明したのがこの本です。決して楽な道ではないが、誰でもその気にさえなれば歩むことができる道です。しかも誰でも必ず通らなければ

ばならない道です。「もっと近道はないか」と横着なことを考えれば、きっと失敗します。無駄をせずに正しい道にご案内しようというのがこの本の目的です。

「外国語の学び方」について広く説明したつもりですが、編集者とも相談して、読者の大部分の方に便利のように、Ⅷを除いては用例を英語だけに限定しました。しかし説明の大部分はそのまま他の外国語を学ぶためにも役に立つことと思います。

なおこの小冊子では言語学の領域に入ることをむしろ意識的に避けたが、その方面に興味のある方は下にあげた書物によることをおすすめします。それ以上の知識を必要とする方はそこにあげてある文献によって専門的研究にも進むことができます。

服部四郎『言語学の方法』(岩波書店)

高津春繁『比較言語学』

同『印欧語比較文法』

服部四郎『音声学』

中島文雄『英語発達史』(以上4点岩波全書)

『世界言語概説』上下(研究社)

この本は企画・構成・取材・執筆すべて私ひとりでしました。ぜんたいの統一のためにはその方がよいと思ったからです。しかしこの本の性質上、校正の段階において私のもっとも信頼する方々のご意見をいれて大幅の修正を施しました。英文は長井善見氏が up-to-date なものに直してくださいました。アラビア語については矢島文夫氏が貴重な意見を寄せてくださいました。Ⅷの会話資料については渡辺和雄氏の助力を得ました。古典語の部分は長男の重朗が検討してくれま

した。

河野與一先生にはふだんからご指導を仰いでいますが、今回は校正を読んでいただき、特別にお世話になりました。

以上の方々の誠意あるご援助なしにはこの本はとうてい日の目を見ることはできなかったことでしょう。また岩崎勝海氏をはじめ編集の方々にはなみなみならぬ手数をおかけしました。

学習者や教師や父兄の手に暖く迎えられ、またその方々からご意見をいただいて、このささやかな書物がさらに成長することを祈りながら、

1962 年 9 月 9 日

長野・富士見高原で

渡 辺 照 宏

目 次

まえがき

I 外国語について 1

外国語がきらいな人(1)——外国語がにがてな人(5)——やさしい英語の小説(8)——習い方しだい(10)——単語について(11)——文法について(13)——むずかしさの解消(15)——外国語を学ぶ利益(16)——外国語というもの(18)——外国語と自国語(22)——外国語学生のなやみ(24)——食わずぎらいと練習不足(26)

II 学 び 方 29

誰でも学べる(29)——赤ちゃんの段階から(30)——はじめのうちは(33)——parrotする(34)——ねてもさめても(35)——集中主義(40)——1日も休まず(43)——グループで学習(45)——目標をたてる(47)——年齢の制限はない(50)——やさしいところをていねいに(53)——感情をこめて(55)——暗記の効用(59)——辞書にしたしむ(66)

III 道具だて 71

A 単語のおぼえ方(71)

単語さえ知っていれば(71)——基本単語(72)
——知らない単語は(74)——単語をおぼえる
には(77)——どうしてもわからないとき(78)
——語源について(80)——単語のグループ
(81)——単語の用法(83)——ありふれた単語
(84)——さまざまの意味(87)——微妙さ(90)
——逆説(92)——気分の問題(92)——むずか
しい言葉の言い換え(94)——思いだすスピー
ド(97)

B 文法の知識(98)

文法という道具(98)——不規則変化の正体
(99)——言葉は生きもの(101)——文法の規
則の意味(102)——英語の特色(104)——複雑
な表現方法(104)——時称の練習(105)——仮
定法の練習(108)

IV 聞き方 112

聞き方の重要性(112)——聞き方の練習(113)
——ラジオの利用(115)——テレビの利用
(117)——映画と演劇(117)——話し上手は聞
き上手(119)——応待のしかた(120)——pas-
sive から active へ(122)

V 話 し 方 123

速成の会話の勉強(123)——発音のこと(124)
 ——適切な表現(127)——道をたずねる(130)
 ——あやまるとき(131)——きまり文句(133)
 ——電話のかけかた(133)——会話の材料
 (135)——適切な話題(136)——wit と anecdote(137)——話してよいことと悪いこと
 (138)——能力の限界(141)——会話の練習
 (144)——会話のひとり稽古(145)——話を進
 めるには(147)——敬語と呼びかけ(148)——
 模倣から創造へ(150)

VI 読 み 方 154

A 読み方について(154)

原書を読む必要(154)——少しでも原書を
 (157)——読み慣れるまで(159)——文章の流
 れに乗る(161)——やさしい本とむずかしい
 本(163)——実用的読書(167)——新聞雑誌
 (169)

B 読み方の実習(171)

やさしい読み物(171)——練習その1, 基本
 単語に注意して(172)——練習その2, つづ
 き(175)——練習その3, 文の解剖(177)——
 練習その4, 能率的な読み方(182)——練習

その5, あと戻りをするな(186)——練習その6, 早読み(188)——おもな単語のまとめ(191)——高級な読み物(194)

VII 書 き 方 201

書くための準備(201)——英文の特色をつかむ(204)——辞典の使い方(205)——書くために読む(206)——日記をつける(208)——習慣に従う(209)——手紙の書き方(209)——story と essay(214)——学術論文について(216)——和文英訳の実習(216)

VIII 第二外国語 225

世界の言語(225)——実用的見地から(227)——教養としての外国語(228)——古典語(229)——外国語はひとつに限るか(231)——得意な外国語(232)——速成には(233)——研究上の必要(234)——どの外国語をえらぶか(236)——フランス語(237)——スペイン語(243)——ドイツ語(249)——ロシア語(255)——アラビア語(263)——古典語の学習(273)——ラテン語(274)——ギリシア語(277)——サンスクリット(281)

むすびのことば 287

I 外国語について

外国語がきれいな人

あなたご自身なり、あなたのごぞんじの方の中に「私は外国語はきれいだ」という人がいると思います。もしそれがあなたご自身であるとすれば、学校の授業も面白くないでしょうし、仕事をえらぶにしても、外国語と関係があまりない道に進みたいと思うことでしょう。もしあなたが教師の立場にあって外国語のきれいな学生生徒を指導しなければならないとすれば、これも一苦勞です。ましてそういう子どもをもった父母や兄姉としては、さぞかし大変なことと思います。ところが今の世界の情勢では、どの方面でも同じように外国語の実用の範囲が日ましにどんどん大きくなっていくのですが、日本でも外国語を知ると知らないとでは一生涯のあいだには大変な差がつきます。そこで、家庭でも学校でも子どもの将来を考えると、なんとしてでも外国語をみっちりしこんでやろう、といっしょうけんめいになります。ところが、はたでいっしょうけんめいにすすめればすすめるほど、当人がよけいにきれいになるのは食べもののばあいとまったく同じことで、一生涯きれいで通すことにもなります。

そこでまず、どうしてきれいなのか、その理由を明らかにすることが必要だと思います。外国語の勉強には覚えることがいつもついてまわります。「覚えるのがめんどうだ」という声をよく聞きますが、物を覚えることは人間の本能の働きといってもよいほど一般的なものであります。覚えることがきれいだという人はまずいないはずで、スポーツ、勝負事、

音楽などにしても、芸能人や選手の名前から楽屋裏の噂話にいたるまで、若い諸君はよくいろいろなことを知って覚えています。覚えることがきらいだという人はまずいないはずです。

それでは覚えることそのものがきらいというのではなくて、面白いことならば徹夜をしても覚えるが、外国語は面白くないからいやだ、と言うかも知れません。ところがこれもおかしい話です。面白いか面白くないかは実際にやってみなければわかりません。外国語の勉強をやるところまでやったが、それでも面白くないからやめた、という話を私はただの一度も聞いたことはありません。やらないうちに面白くないとひとりじめにしている人が多いのです。スポーツの経験のないものから見ると「あんなに骨を折って痛い目にあってどこが面白いのだろうか」とふしぎに思われますが、やっている当人は面白くてやめられないのです。

スポーツや勝負事にしても最初から面白くてたまらないという人はあまりいないと思います。人がやっているのを見て「面白そうだから自分も」といって始めると、はじめのうちはめんどろな事、苦しいこともあります。が、やがて面白くてたまらなくなるのです。

芸事でも同じことで、最初から面白いわけはありません。少しでもできるようになれば面白くなり、面白くなれば進歩も早い、ということになります。

覚えるのは何ごとにつけても楽しいものですが、外国語を覚えてつまらないはずはありません。外国語といえ、つまるところは自分の国語と同じように、聞く、話す、読む、書くという4つがふくまれますが、よほどの変りものでないかぎり、この4つがみなきらいだという人はまずいないと思

ます。話しあったり文通したりする機会がふえる、読めるものの範囲がひろくなり、自分の意志を発表する手段も多くなる。こういうことがきらいだ、という人がいるのでしょうか。スポーツや芸能と同じ程度の努力でこれだけの楽しみが得られるとすれば、外国語を学ぶのは面白くないどころか、やめろと言われてもやめるわけにはいかないほど楽しいものです。

それでもやはり外国語がきらいだと言う人があれば、それには別の理由があると思います。食べものにしても、人によっては、10人のうちの8~9人までが好きだという物をきらい人がいます。そういう人は、まったくの食わずきらいか、さもないければ、その食べもので失敗した経験があるので、それできらいになったという例が多いようです。外国語にしても同じことで、はじめの習い方が悪かったためにきらいになった人も多いのではないかと思います。外国語について、またはその学び方について、何かまちがった考えを植えつけられ、それがもとになってきらいになったのではないかと考えられます。

多くの人の中には、よその人と話をするのはいやだ、とか、本を読むのはきらいだ、とかいう人もいないではありません。しかしその両方ともきらいだ、という人はまず珍しいでしょう。少なくともこの「新書」を手にとってみる人の中にはひとりもそういう方はいないと思います。

外国人がきらいだ、外国のものはきらいだ、という人も中にはいるでしょう。これも程度問題です。自分の家ほど楽しい場所はないし、家族といっしょにいる時が一番幸福だと思うのは大部分の人にとって当然のことには違いありませんが、やはり他人ともつきあわねばならず、よそにも出かけなければなりません。外国や外国人を食わずきらいにするのはあま

り得にはなりません。こういう点からも、外国語の味を覚えた方がよいと私は考えます。

ただし島国に育った私たち日本人には共通の弱味があります。というのは、ひとつの外国語を習うとなんでもかんでも、その国が好きにならなければならないような気がするということです。相手の国がきらいだから、その国の言葉などを誰が習ってやるものか、という考えが一方にはあります。太平洋戦争のときも、英語は「敵性」だから習うな、という声が強くなりました。ところが、その頃むこうの米国などでは日本語熱がさかんで、軍人軍属でも日本語のできるものは優遇される、というありさまでしたし、日本製の英和や和英の大辞典が親版よりも大型のものがたくさん作られて軍に配給されていました。一般によその国では相手の国に対する好ききらいの感情よりも、むしろ実用という点から外国語を学ぶことが多いようです。

ところが日本人は、好ききらいが先立つために、きらいだから習わない、という反面には、言葉がわかるようになるとその相手の国が無条件で好きになる、という傾向が強いようです。英語が好きなら英米に傾き、ドイツ語がわかる人はドイツと軍事同盟を結ぼうとか、とかく極端に走りがちです。こういう点から見ると、これを裏返しにすると、外国が気に入らないから外国語がきらいだ、ということにもなります。相手の国がたとえ好きでもきらいでも、外国語を学んで損をするはずはありません。こういう点にこだわるのは賢明ではないと思います。

たとえば英米人と交際する意志がない人でも、現在、アジアやアフリカの人々と話したり、文通したりするのには英語が一番便利ですし、スペインの本国に興味のない人でも、ス

ペイン語がわかれば中南米をはじめ、世界中の多くの人々と交際することができます。またアジアやアフリカのある地域ではフランス語が通用します。ソ連の政策には関心の薄い人でも、ロシア語の文献を利用することができれば科学や文学を始めさまざまな部門でたいそう利益を得ることも承知しておいてよいでしょう。共産圏の本が安いことは読書人にとってはたいへんな恩恵です。

かりに日常会話だけに限って考えてみても、外国語が話せると話せないとはたいへんな違いです。一步でも国外に出るばあいはもちろん、内地にいてもスポーツや競技でも、趣味や教養の場でも、気軽に外国人と話ができたならばさぞ楽しいだろうとは思いませんか。

どう考えてみても、外国語がきらいだという理由は見つかりそうもありません。ただひとつ考えられることは、できないからきらいだ、という点です。いくら面白いと言われても、できるようになれないとすれば、好きになれるはずがありません。そこで「なぜきらいか」という問題は「なぜできるようにならないか」という問題に切りかえることができます。では、このあとの方の問題に移りましょう。

外国語がにがてな人

外国語はむずかしいからきらいだ、という声をよく聞きます。たしかに外国語はやさしいものではありません。しかし、やさしいとか、むずかしいとかいうのは程度問題です。娯楽や趣味にしても、やさしいとか、むずかしいとかいうのは程度問題です。いくら習おうとしても、綱わたりや猛獣つかいなどは私たちにはとうていできそうにもありません。一流のスポーツマンや芸能人になれるのも限られた人だけです。と

ところが、自転車に乗るとか、マンドリンをかきならすことなら、多少練習すれば誰でもできるはずです。しかしこんな簡単なことでも練習は必要です。のみこみの早いおそいの差があっても、特別に障害のある人を除いては、誰でも練習さえすれば必ずできるようになります。

外国語の勉強もそれと同じで、一人前のひとが一人前の練習をすれば、きっとそれだけの効果があるわけなのです。ところがいったいどの程度まで練習すればよいのか、それを測るモノサシが見あたらないのです。自転車ならころばずに進めればよし、水泳ならば水に浮かんで自由に動けなければ習ったとは言えません。ところが外国語の勉強のばあいには、それほどはっきりした標準が立てられないので、水泳でいうと体が浮くところまでいかないうちに勉強を投げだしてしまう人が多いようです。言いかえれば、むずかしいか、やさしいかの区別さえつかないうちに勉強する意欲を放棄してしまうのです。そしてそれから、いやいや学校の授業に引きずられてお役目でお茶をにごしている、これでは何年たっても上達しないのは当然です。

外国語も習いはじめから腰をすえてしっかり練習する、水泳なら水に浮かぶまで、自転車なら倒れなくなるまで、毎日休まないで練習することが必要です。そこまでいきつかないうちに自発的な勉強をやめたらば、始めから何も習わなかったのと同じ結果になります。

この段階の練習や勉強は必ずしも楽しいものではありません。足をすりむいたり、水をのんで苦しむのも覚悟のうえです。しかし自転車を自由に乗りまわし、水中で自由に動ける楽しみのことを思えば、多少のつらさも物の数ではありません。